
神が消えた日

ユースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神が消えた日

【NZコード】

NZ893Y

【作者名】

コースケ

【あらすじ】

時代は古代。

日本は神の声が聞こえる不思議な女性「卑弥呼」^{ひみこ}の国、邪馬台国をはじめとした国々が列挙していた。

そんな時代に生まれた、もう一人の神の声を聞く力を持つ少女「台」と「与」

幼いころからその力を見出されたローランは卑弥呼の下で修業の日々を送ることになる。

しかし、ある事件をきっかけに台との人生は大きく変わることになる。

プロローグ（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもうつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

また、表現が微妙に違うR - 18版も公開しています。

プロローグ

誰もいない高台。山の中腹にあるそこは、里を一望できるこの場所が私のお気に入りの場所だつた。特別きれいな景色を見ることができるということもある。しかし、何より私が気に入っていたのはここには誰もこないからだ。

ここにいれば私は一人だ。誰も私を恐れない。少なくとも、怯えている人を見ることはない。それだけで私は十分だつた。

私にはどうやら特別な力があるらしい。普通の人には聞こえない声を聞くことができる。簡単に言えば神様の声を聞くことができるのが私の力らしい。それを嬉しく思つたことは一度もない。むしろ憎たらしかつた。

この力のせいで里の人たちは私を奇異な目で見る。敬う人もいれば、露骨に嫌な目で見る人もいる。しかし、全ての人に共通することがある。皆、私を恐れている。

当然のことだ。人は得体のしれないものを恐れる。例えそれが神の声が聞こえるという高尚なものでも関係ない。皆、私を恐れて避ける。おかげで友達もできない。普通、私くらいの年齢の子供なら野原で友達と遊び回るのが普通なのだろう。しかし、私にはそんなことなど許されなかつた。最初は寂しかつた。何で私だけと思つたこともあつた。しかし、今はそんなことを考へることもない。一人でいることに私は慣れすぎていた。

日が沈み始め、夕焼けが私を照らす。山々の間に沈んでいく橙色の太陽を里の人たちは綺麗だと言つ。しかし、私はそれが憎い。一人

でいる時間が終わる知らせだからだ。

日が沈むと里に帰れなくなる。それを避けるためにも私は夕焼けとともに帰らなくてはいけない。私はため息をつき、夕焼けに背を向けた。その時だった。一人の女性が木の木陰から私を見ていたことに気付いたのは。

「何してるの？」

そう訊ねると、女性は苦笑しながら木陰から出てくる。腰まである長い黒髪に、スッと整った顔立ち。子供の私から見ても綺麗な人だと思わせる顔立ちをしていた。そして何より目を引いたのは女性の服だ。巫女服と呼ばれるそれは、私もよく着せられる服だ。里の人たちが言うには神聖な服らしい。そのことから、女性が特別な人なのだと私は感じた。

「ゴメンなさい。一人の時間を邪魔して失礼だつたかしら？」

「いいよ。どうせもう帰るとこだつたし。」

「じゃあ、一緒に帰りましょうか？」

そう言って女性は一コニコと笑つ。その反応に私は驚く。やはり特別な人なんだ。そう思い、私は女性をジロジロと見つめる。

「どうしたの？何か私の顔についてる？」

不思議そうに女性は首をかしげる。

「私が怖くないの？」

警戒しながら私は言う。しかし、女性はニコッとした笑顔を私に向けて言った。

「全然。」

当たり前のことに女性は言つてのける。しかし、私はそれが信じられなかつた。

「嘘だ。」

「どうして？」

「だって私は変な子で、変な声も聞こえるし・・・」

「何でそれが怖いの？素敵じゃない。」

「え？」

女性の言葉を私は信じられなかつた。私の得体のしれない能力を女性は素敵と言つた。怖がられるだけだつた私の能力をただ一言、素敵と。聞きなれないその言葉に、私は何も返すことができなかつた。

「それにね、これから私たち一緒に暮らすのよ。怖いなんて思う相手と一緒に住むと思ひつつ。」

その言葉の意味を私はすぐに理解できなかつた。からうじて一緒に暮らすところの意味を理解した時、女性は既に私の手を握つていた。

「私の名前は卑弥呼。あなたの名前は？」

ニコッとした笑顔で卑弥呼は訊ねる。その笑顔に私は逃げ道を失つてしまつた。

「呂后。」

これ以上笑顔を見るのが恥ずかしく、私は目を背けながら答える。

すると、卑弥呼はクスリと笑つて私の頭を撫でた。それがくすぐつたくて私は手を払いのける。そうしていりうちには、卑弥呼と目が合う。

「よろしくね、台江ちゃん。」

そつ言つて笑う卑弥呼。その笑顔が眩しくて、私は目を逸らした。

これが、私こと台江と卑弥呼の最初の出会い。そして、全ての始まりだつた。

プロローグ（後書き）

このたびは、私の小説を読んでいただきありがとうございました。

時は古代。邪馬台国からヤマトへ繋がる歴史を駆け抜けた女性、台
与がこの物語のモデルとなっています。

歴史的にはおかしい表現も多々ありますが、どうか長い目で浮んで
あげてください。

静かな日々（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもうつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

また、表現が微妙に違うR - 18版も公開しています。

静かな日々

山の中腹にある岩場。まるで里を見下ろす高台のよつて出で張ったそこが彼女のお気に入りの場所だった。昔は人から離れたくて高い場所へ登つたものだ。その名残か、彼女は今でも暇があればこうして里から浮きでた場所へと足を運ぶ。

もはや彼女にとつてこれは習慣みたいなものだった。いつもすることで、気持ちが穏やかになるのだ。

岩場の先端に座り、足を投げ出す。支えを失い自由になつた足が解放感を与え自分の体を軽くする。そんな心地よい感覚を味わいながら、彼女はそこから見渡せる里を眺めていた。

「山頂。そこにいるのか？」

男の声がして彼女は振り返る。山頂。それが彼女の名前だった。

「何か用？私、忙しいんだけど。」

「とてもせつには見えないけどな。」

苦笑しながら男は山頂の隣に座る。短すぎず長すぎない髪を蓄えた

その姿は青年と形容するにふさわしい。このところたくましさを増して、いる彼を台^ヒははじつと見つめた。

依人^{よりと}。それが彼の名前だった。台^ヒがこの里に来てからずつと傍にいる幼馴染のような相手だ。そんな依人と台^ヒもお互い十七歳になつた。嫌でも異性と感じてしまつことがここ何年も続いている。

「ん? 何か俺の顔についてるか?」

「別に。で、何の用なのよ?」

惚けた顔で言う依人からそっぽを向いて台^ヒは言った。

「卑弥呼様が呼んでる。お前、また祭事を抜け出しただろ?」

「だつて面倒だし」

一気に込み上げてきた氣だるさに台^ヒはため息をつく。祭事。神に祈りを捧げて稻作や工事などの無事を祈る行事だ。台^ヒの師である卑弥呼は多くの地域の祭事を取り仕切る巫女だ。当然弟子である台^ヒもその役目を継ぐための勉強をしなくてはならず、卑弥呼の行う祭事には助手として参加するように言われていた。

「まあ、私が行かなくても師匠が全部やるでしょ」

「いやいや、お前が行かないと俺が後でお叱りを受けるんだが」

「別にいいでしょ。私がいつもとは違う場所にいたとかで見つか
なかつたとかにしどけば。少なくとも私は怒られない。」

「俺は怒られんだよ。ほら、行くぞ。」

「ちよ、女の子の腕を気軽に引っ張んな。」

強引に腕を引っ張られ、台_ヒとは嫌々立ち上がる。すると、解放され
ていた足が突然岩場に立つたせいか、その場で台_ヒとはよろめいて依
人の胸にボンと倒れこんでしまった。

「おいおい、大丈夫か？」

心配そうに覗き込む依人。しかし台_ヒとはそれにまともに返事ができ
なかつた。顔が一気にカッと熱くなるのを感じると、次の瞬間には
反射的に依人の体を強引に突き飛ばしていた。

「う、うるさい…さっさと行くわよ…」

顔だけでなく胸の鼓動も速まっている。それを懸すよつて口吐け

ぶと、そのまま山を下り始めた。

静かな日々（後書き）

2話です。依人はもう一人の主人公と考えてくれればいいです。

この調子で毎日更新していきます。

卑弥呼（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもうつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

卑弥呼

「あら山田さん。遅かったわね

」山田の住む里から少し離れた里。そこで山田と宿禰を迎えたのは既に、山田が終わつつある祭事場と、師である卑弥呼の笑顔だった。

「あ、俺、部隊にて報告してこなこと。

「いや、まだなさい。

逃げ出そうとする宿禰を山田は呼び止めた。
「ちやん。」と卑弥呼は呼び止めた。

「えっと、何ですか師匠?

「明日の天気は?」

「一二二二」と笑いながら卑弥呼は言った。その意図を山田はすぐ理解した。

「明日は一日中晴れですね。収穫祭まで大きな雨は降りず、今年も無事に終わりそうです。」

「よろしい。でも惜しいわね。その収穫祭に参加すべき人数。市に持つて行く量まではわからなかつたかしら?」

「さすがにそこまでは・・・」

「やつぱり」と、卑弥呼は残念そうにため息をついた。

「私の部屋に正確な数や他にお寄せを受けたことをまとめた書があるから、後で弟に渡しておいてね。」

そう言って卑弥呼は笑うと、里へ向けて歩き出した。台所は一つ頷くとその背中を追いかけた。

卑弥呼。邪馬台国の女王であり台所の師匠でもある女性だ。幼い台所を引き取り育ててくれた卑弥呼は台所にとつては親のようなものでもあつた。その優しい性格に美しい容姿。そして未来を見る能力に加え、祭事での指揮する力。人を引き付ける力。すべてにおいて上の卑弥呼は台所にとつて超えるべき壁でもあつた。

その後ろ姿は台所にとつて大きく、そして神聖だ。後ろ姿が神聖なのは巫女服のためだけではない。一つ一つの拳動、言葉づかい。それらが全て合わさった神聖な風格。邪馬台国の女王に祭り上げられ

るのも容易に納得できた。

「ねえ台下ちゃん。台下ちゃんは才能があるのに、どうして神様の言葉を熱心に聞くひとつしないのかしら？」

突然卑弥呼が台下に振り返り訊ねる。その質問は台下の胸の奥にずしりと響いた。

「やだなあ師匠。私、これでも全力ですよ。早く師匠に追い付きたくて努力してるんですから。」

慌てて台下はそう返す。しかし、取り繕つたその言葉は簡単に卑弥呼に見透かされていた。

「嘘ね。台下ちゃんには才能があるのは確かだもの。これは神様のお告げにある真実よ。だけど、台下ちゃんは全くその力を生かそとはしない。ましてや依人君と一緒に兵の真似事ばかり。台下ちゃん、私たちの役目は本来・・・」

「『神様の声を聞き、それを正確に伝えて、人々の繁栄を促進する』ことですよね？」

卑弥呼の言葉を遮つて台下は言つ。卑弥呼の言いたいことはわかつ

ていた。神様の声を聞くこと。これが本来台^{タケ}に備わっていた力だつた。しかし、台^{タケ}はその力をここ何年使おうとしなかつた。依人と一緒に剣の稽古や乗馬の訓練をすることが楽しく、性に合つていたこともある。しかし、それ以上に台^{タケ}は卑弥呼にも言ったことのない疑問から修行を止めていた。

「ねえ台^{タケ}ちゃん。どうして台^{タケ}ちゃんは自分の役目を果たさうとしないのかな？教えてくれないかな？」

優しげに訊ねる卑弥呼。しかしその人は真剣だ。いつもの中途半端な答えなど許してくれないだろ？ そう思わせるものがあった。こうなつたら台^{タケ}に逃げ道はない。一つ息を吐き、台^{タケ}は決意を固めた。

「師匠。本当に神様の声を皆さん伝え、皆さんその通りに動かすことが皆の幸せなんでしょうか？」

「じゃあ」といって、

「私、最近思うんです。私たちがやつてこないひとは、結局幸せの押しつけじゃないのかなって。」

それは台^{タケ}がずっと抱いていた疑問だった。この国は卑弥呼を通して神の言葉を聞き、皆がその通りに動いている。作物の種まきや収

穫時期から外交の手法まで。さらには国民一人一人の人生までもだ。住む場所や畠の位置。結婚相手やその職業までも神のお告げで決められる。もちろん不満の声はある。しかし、結局皆は表立つて反発しない。なぜならお告げの結果、上手くいっているからだ。

しかし、果たしてそれは幸せなのだろうかと台下は疑問に思つていた。それは押しつけではないのか。そう考えた時から台下は自らの役割を果たすことに躊躇いを覚え始めていた。

「おかしなことを聞くのね。」

しかし、そんな台下の思いとは裏腹に卑弥呼はクスリと笑つた。

「お告げのおかげで皆が最善の選択が出来ている。その証拠に邪馬台国は飢饉も戦乱も最小限に抑えられてきたわ。周りの国が戦争に明け暮れている中で、これは誇るべきことだと思つわ。」

そつ言つて卑弥呼は誇らしげに空を見上げて背を伸ばす。

「台下ちゃんはどうしたいの？間違つた方向に進む人たちをそのままにしておいて、悲しい結末を迎えることななつてもいいと言うの？」

「それは・・・」

「ね、反論できないでしょ。確かに今の台形ちゃんみたいに疑問を思つことがあるかもしれない。だけど、いつもして平和が続いているのも明らかな事実。それを否定できないのなら、今は自分のやるべきことをしつかりやりなさいな。」

そう言つた卑弥呼の田は普段の優しいものではなかつた。有無を言わせない她的表情。台形はもう反論の言葉を失つていた。

「あ、帰つましょ。帰つたらおこしい晩御飯が待つてゐるわよ。」

いつもの笑顔に戻り卑弥呼は歩き始める。台形はまつそれこ黙つて従つしかなかつた。

卑弥呼（後書き）

続きは明日更新

一人の疑問（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもうつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

二人の疑問

「ねえ依人。私、間違ってるのかな？」

いつもの岩場。卑弥呼と話をした日から一夜が明け、台与と依人の二人はいつものように岩場に足を運んでいた。

「さあな。俺は台与や卑弥呼様みたいに特別な力ねえからよくわからんねえや。」

台与から少し離れた場所で剣を振りながら依人は答える。その態度にムカツとした台与は黙つて足元に落ちていた小石を依人に投げつけた。それは一直線に依人へ向かい、その頭に激突する。

「痛つ。何すんだよ。」

「真面目に答えないからよ。」

頭を押されて抗議する依人。それに向けて台与はもう一度小石を投げつけた。しかし今度は依人も黙つていない。その小石を持っていた剣で弾いて、一気に台与との距離を縮めると、その喉元に剣を当ててみせた。

「女の子に剣を向けるとか最低ね。」

「悪いけど、俺は人に向けて変なモン飛ばしてくる奴を女とは思つてないんでね。」

フンと笑い依人は剣をしまう。そしてそのまま台戸の傍に座ると、ウとため息をついた。

「台戸の考え方、わかるよ。確かに俺たちは幸せを押しつけられてる。それは間違ってるのかもしね。」

いつになく真面目な顔で依人は言う。その以外な態度に台戸は驚く。

「だけどな、結局あの人のお告げおかげで俺たちが安定した生活を送つていらてるのも事実なんだよ。だから、俺はあの人を否定できない。」

そう言って依人はその場に寝転がった。どこか悔しそうに空を見上げる依人。その理由を台戸は知っていた。

そもそも、台戸が神のお告げに疑問を持ち始めたのは依人が原因なのだ。依人は今でこそ軍で働き、この若さで頭角を出すほどになつたが、本来は漁師になりたがっていた。しかしお告げで軍に入隊す

ることに決まり、依人は漁師の道を諦めなければならなくなつた。軍に入隊する前日まで里を抜け出そうとしていた依人。その姿を見て台「」はお告げに疑問を持ったのだった。

「やっぱり後悔してるの？」

思い切つて台「」は依人に訊ねる。すると依人は表情を変えずに頷いた。

「後悔してる。だけど同時に納得もしてるんだ。俺は軍人としてやつてた方が偉くなつた。最近じゃそう思つてる。」

そのあとに依人は「でも」と繋げ、起き上つた。

「夢を追えないってのは辛いな。」

そう言つて苦笑する依人。その表情は悲しそうで、台「」は言葉をかけることができなくなつた。

氣まずい沈黙が流れる。依人は何も話さない。台「」もどう話を切り出していいのかわからない。一人の間を風だけが通り抜ける。なんとも言えない沈黙が一人の間に広がっていた。

「ああもう。やめたやめた。」

頭をくしゃくしゃと搔いて突然依人は叫ぶ。

「やめようぜ、こんな話。なんかいつまでも答え出ない気がするぞ。」

「

「それもそつか。」

台与もため息をついて依人に賛同する。何が幸せなのか、個人が考
えて仕方ない。人それぞれに幸せがある。そのことがわからない
ほど台与も愚かではない。結局、この問題の答えはすぐに出るもの
ではない。台与はそう自分の中で結論づけた。

「そついえば、台与は明日予定とかないのか?」

唐突に何か思い出したように依人は言つ。

「ないけど、どうかした?」

「明日、大牟田国まで行くんだけど一緒に行くか?」

「ああ。『命のとこ』か。」

大牟田国。そして命。その単語がやけに懐かしく感じた。命。依人と同じく台^ノの幼いころからの友人だ。大牟田国^ノの長の一人娘である命は台^ノの唯一の同性の友人であると同時に、依人について話せる唯一の存在だった。病弱であまり外には出られないものの、笑顔のかわいい女の子だ。

「や、命のとこ。明日、ちょっと向^{むか}へ買い出しに行く用事あります。」

「まあ、大牟田国なら大丈夫でしょ。師匠も反対はしないだろうし、ちょっと命の顔を見に行くのも悪くないわね。」

命の顔が浮かぶ。体の弱さなど感じさせない笑顔。それを見に行くのも悪くない。

「じゃ決まりだな。明日の朝、迎えに行くから。」

「あら、馬車でお迎えでもしてくれるの？」

「ばーか。馬車なんてのは命みたいなお淑やかな女^{レバ}が乗るもんだ。」

お前みたいなのは自分で馬に乗りな。」

そう言って依人はイシシとからかうように笑う。分かつてはいたもの、こうも女扱いされないのは腹立たしいものだ。ムッとした台与は依人の頭をベシンと叩いた。

「おお怖い怖い。」

依人は悪びれることなくそう言って、逃げるよう走り去つていった。その振舞いがさらに台下をイラつかせる。

「待てー!」の馬鹿!」

逃げる依人の背中のそつ怒鳴りつけ、台下もその後を追つた。

二人の疑問（後書き）

次回は明日掲載です

出発（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもうつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

「お、早いな。」

「依人が遅いだけよ。」

二頭の馬を引いてやつて来た依人。二頭確保するのに時間がかかったのか、予定よりも少し遅れて依人は待ち合わせ場所に到着した。

「悪い悪い。とりあえず乗れよ。時間押してんだ。」

「誰のせいよ。」

急かされるがままに台^ヒは依人の連れてきた馬のうちの一頭にまたがる。不安定な独特の感覚が体を揺さぶり、台^ヒは手綱を引いて馬を落ち着かせて安定を保つ。その様子を依人はじっと見つめていた。

「何よ?」

「いや、やっぱお前もつたいたい。軍でもそこまで簡単に馬を扱える奴は少ないってのことよ。」

実際その通りだつた。つい最近使われるようになつた馬を乗りこなせる人間は少ない。依人の言う通り軍でも馬をこうして扱える人間は多くない。それでも台与は乗りこなせた。

「ま、これでもかなり練習したからね。」

別に特別な力云々ではない。これだけは自分の努力の成果だという自負が台与にはある。依人が乗りこなせるようになったと聞いて、修行そっちのけで練習したものだ。おかげで、今は軍の人間以外では少ない馬の乗り手。しかも女ではただ一人の乗り手になつっていた。

「しかし何だ。お前、ホントに卑弥呼様の弟子かよ。」

「何よそれ。」

呆れたように言つ依人に台下はムツとして答えた。

「普通、卑弥呼様ほどのお偉いさんの弟子なら、もつと上品でこんなお転婆なことしないだろうが。それこそ命みたいにお淑やかで気品があつて。」

依人が身振り手振りを踏まえながら熱心に語る。どこか自分が非難

それでこらぬつひで虹からすれば面白くない。

「へえ、依人つてそういう女の子が好みなんだ。」

悪戯っぽくちうづと、依人はブツと吹き出して「馬鹿、そんなんじゃねえよ。」と叫ぶ。

「じりだか。」

わざと虹は拗ねたような素振りを見せてみる。こんな態度を見せれば依人はどういう反応をするだろつか。それを考えると何故かドキドキしてきた。

「まあ、お前みたいに活潑な子も悪くないと思つたどよ。実際、一緒にいて飽きないし。」

「うわ、もしかして口説いてるの?」

「ねえよ、馬鹿。」

実際、自分でも馬鹿だと思っていた。何の気ない会話で感情が浮き沈みしてることなど、虹は経験したことなどなかつた。それな

のに、依人が自分のような女の子を悪くないと言つたことを台下は嬉しく思つてしまつた。それと同時に自分を口説いてるのかといふ問いに依人が即否定したことがショックでもあつた。

「つたく、あんま無駄話してると向こうに付いたら夜になるな。」

「うん。」

「『うん』じゃねえだろ。ほら、行くぞ。」

依人が馬を走らせたことによつやく台下は自分が上の空だったことに気付いた。本当に、突然どうしてしまつたのだろうか。自分でもわからなかつた。

「ええい、しつかりしろ台下。」

自分にそう言い聞かせ、台下は依人の後を追つよつに馬を走らせる。乗り心地がいいとはお世辞にも言えない振動と、走るほど向かつてくる追い風。それを相手のしていりながらに台下のモヤモヤした感情も流されていった。

出発（後書き）

次回は明日更新

大牟田国にて（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもらつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

大牟田国にて

邪馬台国。卑弥呼の統治している国はそう呼ばれている。しかし、その大層な名前の割に規模はさほど大きくない。むしろ周辺諸国と比べると小さいくらいだ。しかし、そんな邪馬台国の女王卑弥呼は規模に似合わず大きな影響力を持つている。それは彼女の持つ予言の力、そして周辺諸国の関係が大きく起因している。

数年前、このあたり一帯の国々の間では戦争が盛んだった。度重なる戦乱。人々の心は疲弊しきっていた。そんな国々を結びつけたのが卑弥呼だった。卑弥呼は自身の予言の力で次々に国を説得。停戦にこじつけ、恒久的な平和条約まで締結させた。その功績と力から、卑弥呼は絶対的な存在として諸国から崇められているのだ。そして、ここ大牟田国もそんな卑弥呼を崇める国の一つだった。

「相変わらずここは賑やかだなあ。」

感心したように依人は言う。活気に満ちた市場。物々交換のための競りが行われているそこは怒号も時折入り混じる。それが何軒も連なっているここは賑やかという範疇を通り越すほどだった。

「まあ当然でしょ。大牟田国は商業の中心。このくらい活気がある方がいいってものよ。」

台』の言葉に「まあな。」と依人は相槌を打つ。

大牟田国。商業の中心であるここは多くの国の物が集まる。同時にここは保護区となつており、商売を専門とする人間たちの自治区だ。まだ戦乱が盛んだったころからもこの独立は守られ、一種の平和の象徴とも言える国だつた。

「そういえば依人。あんた何も持つてないけど、そんなんはどうするの？」

ここまで手ぶらで来ていた依人に台与は訊ねる。馬は馴染みの店が預かってくれているものの、買い出しひとなれば話は別だ。物々交換が原則のここではこちらも何か持つていないと買い出しなど出来ない。しかし、依人は完全な手ぶらだ。これでは何も買えるわけはなかつた。

「ああ、先に物は渡してんだ。今回はそれを取りに行くだけ。」

「ふうん。」

つまりは信用取引というわけか。珍しいことではない。季節物の取引などでは物が揃わないことがある。そのため、あらかじめこちらが物を渡し、後に受け取る。お互いに信用がないと成り立たない取引だが、最近では活発に行われる取引だ。

「まあ、量が量だけに少し時間がかかるかもな。」

「へえ、そんなに交換に出したんだ？」

「まあ、隊のみんなの分だからな。帰りは荷車でも借りないとキツイな。」

ため息をついて依人は服から木の札を取り出す。取引に使うための交換札。ヒヨコッと台下は覗いて見た。

「うわあ、確かに結構な量だね。」

「だろ?」

札に書かれていたのは取引の品だ。ざっと見ただけで普段扱う品数の倍以上ある。

「これを2人つてのも酷な話だよねえ。」

「だよな。ホントは何人か来るハズだったのにアイツら・・・」

「ん? どうしたの?」

「いや、何でもない。」

ため息混じりのそう言つと、依人は頭を搔いた。

「とりあえず、俺は今から取引相手に会つてくるから、お前は先に命のどこに行つてくれ。俺も用事終わつたらすぐに行くから。」

「いやいや、あの量を一人じゃ大変でしょ。私も手伝つて。」

「大丈夫。別にすぐ取引するわけじゃないからな。荷物受け取るのは明日。今日はそれの打ち合わせだ。」

「あ、そつか。」

あの量だ。確かに行つてすぐに交換というわけにもいかないのだろう。なら、行く意味はないか。△△はそう判断すると「うん」と頷いた。

「じゃ、先に命のどこ行つてるから。せいぜい頑張つて来なさいな。」

「

「はいはい。頑張つて仕事してきますよつと。」

ため息をついて依人は市場の奥に向かつて歩き出す。その姿を見送り、台^レとも人^レごみの中へ歩きだした。

大牟田国にて（後書き）

次回は明日更新

大牟田国にて（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもらつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

大牟田国にて

大牟田国。商業の中心であり、商人たちの自治区であるそこを束ねる長もやはり存在する。その家は市場から少し離れた住居区の中心にあり、他の家よりも大きな佇まいの屋敷。それが長の家だった。

「止まれ。」

その門にはいかつい風貌の門番が立っている。その男はフラリと門に近づいた台_レを不審に思つたようで、槍を持って齧すような低い声で台_レを止めた。

「何用だ？」

無愛想に睨みつけたまま男は言つ。

やれやれ、新しい人か・・・

ため息をついて台_レは苦笑する。いつもの門番ならほんと顔_{ハス}だが、どうやらこの門番は新しい人らしい。顔_{ハス}が通じる相手以外から見れば台_レなどただの小姑娘だ。この門番のように不審がるものも無理はない。

しかし、理解はしていても面倒なものだ。やれやれと台所は一つため息をつくと、スッと男の顔を睨みつけた。

「『山口』が来た。やつにはまだ見えてくれないかしら？」

予期せぬ言葉だったのか、その言葉に門番の顔が驚きに満ちる。しかし、すぐに表情を戻すと再び疑いの眼を台所に向けた。

「山口様といつ證明は？」

「ないわよそんなの。」

「ならば通すわけにはいかん。」

門番も譲らない。「うなると厄介だ。自分が台所である證明など持つていてるハズがない。それに、一応は卑弥呼の弟子として名の通っている台所だ。それが一人でフラリと訪ねてくるなど傍から見れば怪しいことこの上ない。それ相応の訪ね方をすると思われいともおかしくないし、こんなに気軽に訪ねてくる方が怪しいというのだ。

「お願い。話してくれたらわかるからさ。いじは信じてくれないかな。」

「ダメだ。ほら、今なら見逃してやるから、さっさと帰りな。」

「ケチ。」

「ケチで結構。」

「うなれば何を言つても無駄だ。ここまで怪しまれれば打つ手がない。どうしたものかと台が困り果てていると、屋敷の奥から髭を蓄えた男が出て来た。

「騒がしいな。何事だ？」

「はっ。それが・・・」

その男は門番よりも一回り小さく、体つきも門番に比べると細い。しかし、その目つきは鋭く、感じる威圧感は門番のそれよりも遥かに大きかった。大物。一言で表すならその言葉が一番適切だろう。そんな男の目がギロリと台を見つめた。

「ど、ども。」

苦笑して台は会釈する。その瞬間、男の目がカツと見開いた。

「おこ、お前。」

男は門番を振り返り肩を掴む。低い、威圧感を帯びた声。門番はなぜ自分がそんなことを言われたのかわからないのか、「は？」と憮けた声で返事をする。その瞬間、男はギロシと門番を睨みつけた。

「馬鹿野郎！この方は台下様だ！無礼なマネしたんじやないだろ？
な！」

「も、申し訳ありません！」

門番は直立不動になり頭を下げる。巨体がぐの字になり自分よりも小さな相手に頭を下げているのは、見ていてどこか可哀そつに思えてくる。

謝られても困るんだけどなあ・・・

台下は苦笑する。面倒だったのは確かだが、ここままでして欲しいとは思っていない。逆に謝られているこちらが悪者にまで思えてきた。

「台下様、申し訳ありません。この者には後でキツく言つておきます

すので。「

そう言って男も頭を下げる。

「いやいや、いいですよ別に。むしろ心強いです。」ヒカルが強固な門番ならいがなる侵入者をも防いでくれるでしょう。

「も、勿体なきお詫び葉ー!」

そう言つと、門番は一層深く頭を下げる。先ほどまでの堂々とした態度はそこにはない。一段と小さく見えた門番。しかし門番がそこまで頭を下げる理由もわからなくなってしまった。

「あ、今のは予言とかじやないから。私個人の感想。あなたがここ の強固な門番になれるかどうかはあなたの努力次第ってことで。」

そう付け加え、台灯は微笑む。そう。卑弥呼の弟子である台灯の一言は重いのだ。台灯が意図せずともそれは予言と捉えられ、人はそれが決まった未来であるように思つてしまつ。だからこそ、この門番の反応も理解できなくはなかつた。

「じて台灯様。今日ははどういった用事で?」

「あ、そうだった。命いますか？」

「娘ですか。それなら今連れて来ましょう。」

「ああ、大丈夫です。私が行きますよ。」

「そう言つと、男は「申し訳ありません、娘のために」とペロリと頭を下げる。

「あ、あとで依人も来ますんでよろしくお願ひします。」

「依人殿もですか。ならば今田はお泊りになるおつもりで？」

「そうですが、もしかして都合悪いですか？」

「いえいえ、台下様がお泊りになるとは光榮なこと。どうぞいらっしゃり。」

そう言って長は再び頭を下げる。それに軽く会釈し、今度は屋敷の門をくぐった。

大牟田国にて（後書き）

次回は今日の夜中更新します

命（マム）（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもうつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

命(ノミコト)

「おじやましますつと。」

さすが長の家と言つべきか、屋敷の大きさは邪馬台国の本殿に近いものがある。広々とした部屋が用途に分けていくつも並ぶ。一般的な家が一つしか部屋がないことを考へると、それはまさに権力の象徴と言つても過言ではない。そんないくつもの部屋の一一番奥。そこが命の部屋だった。

「命、入るわよ。」

「え? ぬけぬけやん?」

「そ、遊びに来ちゃつた。入つていい?」

「えつと。依人くんは・・・」

小さな命の声が中から聞こえる。依人に見られたら困るものでもあるのか、その声はどこか恥ずかしでも混じつているようだと思えた。

「アイツなら今買い物中。だから別に命が裸でも何しても・・・」

「は、裸じやないよ！」

抗議するような命の声。顔は見えなくともその顔が真っ赤になつているのが想像できるくらい単純な反応。やはりからかいがある。台^ヒは可笑しくなつてニヤニヤと笑つた。

「はいはい。じゃあ今依人に見せられないような格好の命さん。そろそろ部屋に入れてくれませんか？」

「むう・・・そういうこと言いつ。」

「拗ねない拗ねない。ほら、開けるわよ。」

拗ねたように言ひ命などお構いなしに台^ヒは扉を開ける。そこにはたのは当然裸の命ではない。長い黒髪に美しい衣を着た少女。台^ヒに比べてよっぽど姫といつ肩書が似合つであろうその風貌がそこにあつた。

「久しぶり、命。」

「久しぶり、台町ちやん。」

そう言つて命は微笑む。相変わらずの品のいい笑顔。依人が言つのも無理もない。本当に美人といつべき少女が命なのだ。

「どう、体の調子は？」

「うん。最近は結構落ち着いてるんだ。普通に歩けるし、外へ出ても平気。」

「へえ。じゃ、来週の収穫祭には来れるんだ？」

「そうだね。この調子ならお父様も許してくれると思つ。」

命は一コリと笑う。収穫祭。それは邪馬台国最大のお祭り行事だ。一年の収穫を神に感謝するという行事。卑弥呼が主催するそのお祭りは毎年盛大に行われ、各国から多くの人たちが参加する。大牟田国の長の娘である命は昨年も招待されたのだが、体調がすぐれないために参加することが出来なかつたのだ。そのこと命は残念に思つており、台町たちが訪ねるたびに「今年は参加したいなあ」と漏らしていたのだ。

「でも金田ちゃんは忙しいんだじゃないの？」

「ああ、大丈夫大丈夫。私がやるのはせいぜい舞程度だし、後は師匠が何とかするでしょ。」

そう言つて金田が冗談っぽく笑うと、命は可笑しそうにクスクスと笑つた。

「卑弥呼様の弟子なこと、金田ちゃんっておかしいよね。」

「ん？ やつは変？」

「ううん。その方が金田ちゃんらしい、私は好きだよ。」

そう言つて命は一いつ口ひと笑う。上品で高貴の奥さが滲み出でている命の笑顔。金田は自分が絶対に出せないであろうその笑顔をかわいいと思つた。

「ありがと。」

だから金田は短くもう返すことしか出来なかつた。照れ臭く、そして命の笑顔は直視するには恥しくて目を逸らす。そうしている

「お腹空いてない？今、何か持つてくるね。」

そう言い残し、命は扉を開けて外へ出る。その瞬間、外から別の女性の声が聞こえた。

「命様！…そいつたことは我ら下々の者にお任せください…」

「でも、私のお友達だから。」

「いいえ！それでも命様はお部屋でゆっくりされていていいんです！お呼びくださいに参りますので！」

そのやり取りを聞くだけで『命』は命の表情が手に取るようにわかり、思わずクスクスと笑ってしまう。命の性格だ。自分で家事でもしようとこちらを女中に見つけられ、怒られているのだろう。困ったように笑いながら女中の声に押される姿は想像に難しくなかつた。

「怒られちゃつた。」

案の定困ったように笑いながら命は部屋に戻ってきた。それを『命』

は笑つて迎える。そう言えば、来るたびに同じ光景を見ていた気がする。自分から家事や接待をしようとした命が女中に怒られ、困ったような笑みで戻つてくる。命らしい光景に台戸はクスクスと笑ってしまう。

「どうかしたの？」

「いや、別に。」

首を傾げて命は再び台戸の前に座る。そこから二人は他愛のない世間話を始めた。命はもっぱら家のことだ。父親が過保護だ、女中の皆がなかなか家事をさせてくれない。家にいる時間が長いこともあり、不満は次々に漏れてくる。台戸は卑弥呼に怒られたことや、邪馬台国の最近の様子、依人のこと。特に依人のことは話題に尽きない。お互いによく知っている友人だからだろうか。自然と会話は弾んだ。

命？（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもうつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

命？

「それで依人がね。」

どのくらい時間が経つただろうか。その言葉からどんどん話題が出てくる。

笑ったり、怒ったり、話をするたびに色々な感情湧き上がる。そんな会話がどれほど続いたらどうか。ようやく一息ついたところで、命がクスリと笑った。

「咲ちゃんって、依人君の話をする時、本当に楽しそうだよね。」

「え？」

「いつも一人だし、何か妬けちゃうかな。」

「な、何言ってんのよ！別に依人は幼馴染っていうか……」

顔が一気に熱くなるのを感じる。何でそんな感情になっているのかはわからない。ただ照れ臭く、たまらなく恥ずかしいのだけは理解できた。

「いいなあ台下ちゃん。傍にあんないい人がいるなんて。」

「だから依人はそんなんじゃ・・・」

「じゃあ嫌い?」

「う・・・」

命の追い打ちに台下は言葉に詰まってしまった。「ヤーヤと笑う命。たまらなく恥ずかしい感情が台下を包んでいく。別に依人を好きとか嫌いという感情で見たことはない。傍にいるのが当然というか、何と言つか。時々ムカツとすることもあるけど、基本いいヤツで、一緒にいて飽きないというか。

「あらり、台下ちゃん固まっちゃった。」

命が苦笑するのも台下は気付かない。台下の思考は完全にグルグルと周り、ショートしてしまっていた。
そんな時、扉をトントンと叩く音が響いた。

「命。依人だけど入つていいか?」

「あら、依人君。うん、入つていいよ。」

依人。その名前の響きに台^ヒの胸はドクンと高鳴る。それと同時に頭で考えていたことが全て吹き飛んでしまった。

「うわあああああ！」

思わず素つ頓狂な声が飛び出る。それと同時に台^ヒは立ち上がり、ガシッと扉を押さえつけた。

「あれ？ 開かないぞ？」

「帰れ。」

顔が真っ赤になっているのが自分でもわかる。もしこれを依人に見られたら。それを想像するだけで恥ずかしさが胸から溢れ出しそうだった。「は？」と意味がわからないという声を依人は上げる。その声が再び台^ヒの頭に火を付けた。

「帰れって言つたら帰れってことよバカ！」

「ちよ、△△か？何があつたんだよー。」

「うるせー、このバカ！」

「いや、意味わからんないからー。とりあえず落ち着け。な、会つて話を・・・」

「開けんな！開けたらぶつ殺すからー。」

「いやいや、何でなんだよ。つか命ーいるんなら△△を止めてくれよー。」

「何も聞こえない。」

「ちよ、△△さん？ホント頼むからー。」

そんなやりとりの中、突然扉がガタリと音を立てて外れた。

「つまー。」

バランスを失い倒れそうになる依人。倒れまいと手をバタつかせるも、周りに掴むものはない。さすがにマズイと台^ヒトは思い、その体を支えようとする。その時だった。

ムニヤリ。

その瞬間、台^ヒトを未知の感覚が襲つた。ムニヤリ。胸に感じたそれが何を意味しているのか、台^ヒトは理解できなかつた。ゆっくりと自分の胸に目をやる。そして確認した。自分の胸を何者かの手が驚掴みにしているのを。それを恐ろしいほど冷静に台^ヒトは理解した。そう。それ自体なら単なる事象だ。腕が胸を掴んでいる。それだけだ。では誰の手が？台^ヒトの目がその腕を辿る。まっすぐ、ズラッと腕を辿る。そして見た。その先にあるものを。

「へ？」

「あ・・・

その腕の主と目が合つ。それは台^ヒトのよく知る人物だ。それが誰か理解した瞬間、台^ヒトは自分の顔に火が灯るのを感じた。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああああああああー！」

「ちょ、待て！これは事故で・・・」

「！」のバカああああ！」

台下は勢いのまま依人の顔を思い切り殴る。すると「ぶつ！」という醜い音を立てて依人の体は部屋の外へ吹き飛んでいった。それでも台下の気持ちは治まらない。顔は熱く、胸は苦しい。恥ずかしさが頂点に達し、穴があれば入って蓋まで閉めてしまいたいくらいだつた。

「台下ちゃん……」

「ひあ！」

肩を叩かれ、台下は素つ頬狂な声を上げて振り返る。そこには苦笑を浮かべた命の姿があつた。

「とりあえず、後で依人くんに謝つといった方がいいよ。」

「あ・・・」

そこでようやく台与は正气回った。正气回った台与の前に広がっているのは、壊れた扉。苦笑する命。そして大の字になつてのびている依人の姿だった。

愉快な食卓（前書き）

この小説はファイクションです。

古代を舞台にしたファンタジーと思つてもうつた方が差し支えない
と思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない
大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ
人には奇妙に感じる部分が多くあると思いますが、どうかご了承く
ださい。

「いや、だから『メンツ』って。」

「依人くん。台『ちゃんも反省してるからさ。そろそろ機嫌直してよ。』

台『』と命の言葉を無視し、依人は無言のまま口に放り込む。

命の家。その見事な大広間では台『たちの歓迎の宴が催されていた。とは言つても、有力者たちが集まつて盛大に開かれているものではない。家の主である命の父とその召使が数名いるだけのこじんまりとしたものだ。床には毛皮が各々の席に敷かれ、円を描くように並んでいる。そうした並びの食卓では普通会話に花が咲くものだが、今回は違つた。明らかに機嫌の悪い依人に気を使つてか、あまり会話が進まないのだ。

「依人殿。このような美人一人に話しかけられて無視とは、男児として如何なものかな？」

台与たちの様子を気遣つてか、命の父が依人に声をかける。すると依人は持つていた器の中身を一気に口に掻き込み、フツと一息ついた。

「ああ、悪かつたな。別に命は気にすることないさ。あれは命じゃ

どうにもできなかつた。」

そう言つて依人は命に微笑みかけると、器を置いた。

「で、体の調子はいいのか？その分だと調子いいみたいだけじ。」

「あ、うん。お陰様で。」

「そつか。じゃあ今年の収穫祭は来れそうだな。今年は連合の数も増えたし、いつも以上に盛大な祭りになるぞ。」

そう言つて依人は嬉しそうに笑う。

「叔父殿。この飯は美味しいですね。いやあ、毎回ご馳走になつて申し訳ないです。」

「あ、ああ。それは別に構わんよ。」

命の父が苦笑する。それに構わず依人は豪快に、大げさとも言えるくらいに笑つてみせた。

「ちょっと、私は無視？」

たまらず台^ヒは依人を睨みつける。しかし依人は視線をブイと逸らしてそれを無視した。

「おじさんだつて言つてるでしょ。女の子が頭下げてんのに、それを無視するつて男としてどうなのよ？」

「俺はあんなことで人の顔面をブン殴るヤツを女とは思つてないんでね。」

「それは、アンタが・・・」

そこまで言つて台^ヒは黙りこんでしまう。あの自分の胸を掴まれた感覚が戻ってきて、恥ずかしくなったからだった。ましてや相手が依人だ。思い出すだけで逃げ出しあきたくなるほどだった。

「ハツハツハハ！そういうことか！」

突然、豪快な笑い声が場を包む。笑い声の主は命の父だった。楽しそうに、ニヤニヤと台^ヒと依人を見比べると、手を叩いて再び笑い始めた。

「依人殿。それは誇るべきものだぞ。」

「な！」

声を上げたのは一人同時だつた。気がつけば、周りの召使いたちも何が起きたのかを悟つたようで、ニヤニヤとした笑みで一人を見つめていた。

「依人殿も幸せですね。このように美人な方が相手となれば、男冥利に尽きるといつものでしょう。」

男の召使いの一人が声を上げる。

「台戸殿も嫌というわけではないでしょう。依人殿ならばなかなかの男児ではありませんか。」

今度は女中の一人が可笑しそうに声を上げる。その言葉に再び台戸は顔が一気に熱くなるのを感じ、そのまま俯いてしまった。

「いや、皆、何か勘違いを・・・」

「依人殿。照れなくてもいいぞ。しかし何で言つてくれなかつた？命も、私には教えておいて欲しかつたぞ。」

「えつと、お父様。何か勘違いをされてるのでは・・・」

命が困つたような視線を父に送る。しかし、父は「はて」と首を傾げるのみだつた。

「あの、叔父殿。叔父殿には俺たちがどういづ関係に見えてるんですか？」

依人がそう訊ねると、命の父はキヨトンとして召使いたちと顔を見合わせる。そして確認するようにニヤリと笑みを浮かべた。

「どうこうして、あれだろ？一人は男と女の関係になつたと・・・

「はああああああ？」

今度は命を加えた3人分の声が響く。どこをどうすればそんな勘違いになるのか、台^ヒには意味がわからなかつた。ただひたすらに恥ずかしく、この場を去つてしまいたい。そんな衝動に駆られるも、それは隣の命によつて阻まれる。仕方なく恥ずかしさに耐えて、命はその場でじつと小さく丸まつた。

「なんだ、違うのか？」

「いや、そもそもそんな考えになる意味がわからないんですが・・・」

「

「だってなあ、男が素っ気なくて女が顔真っ赤にしてる様子なんて見たら・・・なあ？」

「てつきつそつこつ関係になつたのかと。」

命の父と奴使いはそう言つてお互ひの顔を見合わせると可笑しそうに笑う。

「なんだ、違うんですか。」

女中はガッカリしたようにため息をつく。

「でも、だとしたら何で台と殿が依人殿を殴る必要があつたんだ？」

「ああ、それは・・・」

マズイ。台与は依人の反応に本能的にそう感じた。しかし、そう感じた時には既に遅い。続く言葉が依人の口から出でてしまっていた。

「ちょっとした不可抗力で俺の手が台与の胸を掴んじゃったんですよ。そしてら、台与が顔真っ赤にして俺の顔面殴つてきて・・・」

終わった。恥ずかしさが身を包む。同情か、命が台与の肩を叩く。一瞬凍りつく場。

「それだけ？」

「はい、それだけ。」

命の父と依人の短いやり取りが交わされる。一拍、再び場が沈黙に包まれる。そして次の瞬間だった。

「ハツハツハツハツハ！」

誰からともなく笑い始め、場は一気に笑いの渦が巻きあがつた。

「まつたく、台^ヒ戸^ト殿は乙女ですかー。」

「初々しいのもほびがあるところか・・・」

「依人殿！羨ましい！」

皆がそれに囁かれてる。そのたびに台^ヒ戸^トは自分の顔から火山が噴火するような感覚に襲われた。恥ずかしい。逃げたい。そんな感覚が台^ヒ戸^トを包む。しかし、それは出来なかつた。恥ずかしさで足が竦み、まともに頭が働かないからだ。今はただ、その恥ずかしさを受け止めて、顔が燃え上がるのを為すすべなく受け止めることしかできなかつた。

「何だみんな。別にそんな嬉しいもんじゃないけどな。揉みこたえなんてあつてないようなもんだつたし・・・」

その瞬間、その言葉が台^ヒ戸^トの中で何かを呼び起こした。恥ずかしさとは違う何か。恥ずかしさとは別の熱さが台^ヒ戸^トを包み始めていた。

「依人くん、ゴメン。さすがにそれは庇えないよ。」

命が依人の肩を叩く。キヨトンとして周りを依人は見渡す。そこは既に笑いなどない。皆、一様に静まり返つて気まずそうに依人を見

つめていた。

「そうだな。今宵の宴はこれまでにしよう。皆、片づけてくれ。命、お前も手伝いなさい。」

「はい、お父様。」

命の父でさえ気まずそうに周りに指示を出し始める。召使いたちは何とも言えない表情で片づけを始めると、あつという間に食器の類はそこから消えた。そのまま召使いたちも姿を消す。命と父もいつの間にかどこかへ行つたようだ。

「なんなんだ一体・・・」

依人は頭を搔いて困惑した表情を浮かべる。めでたいことに、この男は未だに自分のしてかしたこと気に付いてはいなかつた。自分の発言が一人の夜叉を目覚めさせたことに・・・

「依人。何か言い残すことは?」

「は?」

「揉み」たえがなくて悪かつたわね！」

腹の底から溢れる不満を思い切り叫び、台下は依人の頬を思い切り平手で殴つた。

「痛つ！何すんだ！」

「うっさい！こればっかりは本気で許さない！」

ポカんとする依人を台下は再び殴りつける。今度は平手ではない、拳を握つての一撃だ。さすがに効いたのか、依人は殴りつけられた頬を押さえて台下を睨みつける。しかし、所詮は人の睨み。修羅のごとく怒りに燃えている台下にそんなものは何も効果を見せなかつた。

「さあ、言い残すことはない？」

「ちょ、ちょっと待て。一体俺が何を……」

ようやくその怒りの大きさに気付いたのか、依人は説得しようとすると。だが、既にそんなものでは止まらないところまで台下は達していた。

「死ね！このバカ！変態！」

台与の叫び声と、依人の断末魔の叫びが響く。その夜、何が起きたのかを住人たちは知らない。ただ、翌朝ボロボロになつた依人が発見されただけで、命を含めた住人たちは何も詮索しようとしなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2893y/>

神が消えた日

2011年11月17日19時57分発行